

特集

[長崎大学] まちづくり 新時代

地域の持続可能性が問われるいま、
地域と大学との関係にも進化が求められています。
大学が地域で果たしうる役割は何なのか。
NPO、商店街、行政や卒業生の立場から
それぞれの思いを語っていただきました。



理論と実践の
すり合わせ
学生の視点が
新たな気づきに

山口先生の専門領域は、地域経済。行政の審議会や委員会、公民館講座などにも積極的に参画されており、市民にもおなじみの存在です。山口ゼミでは、これまで商店街の調査や地域の物産開発、震災復興支援など、さまざまな取り組みを行ってきました。

「地域経済の理論書を読み込んで、それに基づいて現実を考えてみるとどうなるか。理論と実践ですね。頭でっかちでも困るし、現実しか見ないのも困る。すり合わせていくなかで解決策が見えてきます。私は、学生と教員は対等のチームで、一緒に物事に取り組むのだと考えています。たまたま私にはアカデミックな経験があるかもしれない。しかし学生は違う視点からの気づきがあり、素直に驚き、正論を吐く。新しい研究や活動につながっていくこともあります。」

印象的な事例はありますか？
「私が長崎大学に着任した翌年

の二〇〇一年、私のゼミでは疲弊する商店街の問題に取り組みました。ちょうど大型商業施設があちこちにオープンしたころです。長崎市の城栄町商店街には、朝昼晩と通う高齢者が多いわりに、休憩・交流できる場所がないことがフィールド調査でわかってきました。そこで、商店街組合にコミュニティスペースを作ると提案したのですが、金銭的な問題もあり実現しない。あきらめて退こうとしたら、ある学生が「それじゃあお客さんが困る。私たちがやります！」と言い出しました。そこで、あるビルの社長にプレゼンテーションし、フロアを一年間

長崎大学 経済学部

山口純哉

今回のテーマは「地域のなかで長崎大学に何ができるのか、立ち止まって見直してみよう」。
学生とともに地域での学びを十五年間実践してきた
経済学部の山口純哉准教授と共に考えていきます。



「学問」と 「現実」の間で

学生は何を 見つけられるのか

無償でお借りできました。椅子やテーブルは、ホームセンターと建築士さんの協力をとりつけ、親子木工教室を開いて製作。日中は交代で現場に出て市民と交流しながら年間六十ものイベントを行いました。当時中心になったゼミ生たちは、就職後も駅ビルの開発で地元商店街と協働を模索するなど、学生時代に培った視点を活かしています。

「かっちえる城栄」ですね。当時メディアでも大きく取り上げられました。

「二〇〇五年からは長崎で活動するNPOや市民グループを一堂に集め、横のつながりのなかでお互いの課題解決を図るコミュニティビジネススクウェア

ながさき(CBSN)を立ち上げ、学生主体で運営しました。それまでそういう場がなかったこともあり、参加グループにも好意的に受け止められました。学生にとっても、世間一般に言われる「行政の縦割り」「地域の市民活動家」など、本で学んだことを現実に見ることができました」。

地域との 取り組みに必要な 覚悟とフィードバック

山口先生の原点は、大学院生の時に遭遇した一九九五年の阪神淡路大震災。指導教員と二

人、神戸長田区の避難所で聞き取り調査を行い、市民の立場から復興計画に提言等をしたそうです。

「被災直後から五年間ですからね、修羅場も経験しましたよ。しかしそのときに感じたのは、まちづくりで提言するというのは、そこにいる市民や事業者の生活を扱うこと。学生も教員もある種の覚悟がないと通用しない。単に研究させてくださいだけでは迷惑のかけっぱなしで終わります。最後には必ず情報を地域にフィードバックしなければバランスが悪いし、うまくいかないのです。もともと学生が必死にくらいについては、少々失敗くらいでは怒りませ

んよ、地域の人は」。
とはいえ、順当にテーマを見つけていける学生ばかりとは限りません。

「問題意識を持ってない人が、どうやってテーマを見つけるか。そのために私は自分が受けた行政の委員会やシンポジウムなど、外の場に学生を連れだします。食わず嫌いでではなく、あらゆる事象に積極的に接しながら、様々な問題や立場の違う人たちに触れてほしい。このプロセスで苦しむ学生の方が学びは大きいですよ」。

「学問」と「現実」の間を歩き来しながら、研究も社会貢献も学内の活動も教育に結びつけている山口先生。「最終的には、社会全体を見て自分が必要かどうかに取り組める人材を一人でも多く輩出していきたい」と語ります。

やまぐちじゅんや
1971年愛媛県松山市生まれ。神戸商科大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。2000年より長崎大学、2007年より現職。専門は地域経済学(産業集積、ソーシャルビジネス、震災復興)。長崎市民民力推進委員会・委員長や大村市中小企業振興会議・会長、九州ソーシャルビジネス促進協議会・幹事を歴任。著作に『だからSB(ソーシャルビジネス)はやめられない』(宮崎文化本舗、共著)など。



「かっちえる城栄」での木工教室。子どもたちと学生もすっかり顔なじみに。

Interview

長崎の人々は長崎大学をどう見ているのか？
長崎大学と地域の新しいつながりの可能性とは？
そこで、市民やNPO、行政の方々に集まっていただき、
学生も加わって座談会を開催しました。

キーワードは 地域愛!?

山口／地域と大学の関係は以前から注目されています。九十年代に学生をどんどん地域に出そうという盛り上がりがありました。それが、その後下火になりました。単に地域に入って何かしたという体験だけでは役に立たないし、受け入れ側は毎回ゼロの状態の学生と同じ説明をしなければならず、前に進んでいる感じがしない。そこを教育と割り切ってもらえればいいが、なかなかそうもいかない。しかし最近になって再び盛り返してきて、学生もいっしょにまちを

作っていかうという動きがあります。そこで、ここで一度立ち止まり、市民の方々のざっくりとしたご意見を聞きたい。まずは長崎大学との関わりを含め自己紹介をお願いします。草野／新大工町商店街のなかの新大工町市場の理事で、惣菜店をやっています。以前、商店街で宅配サービスを行うにあたって、料金や求められる品目などの聞き取り調査で山口ゼミにお手伝いいただきました。採算重視の私たちとは違い、役に立ちたいという熱意と柔軟な発想が

新鮮でした。「大学生だってこんなに考えているのに、俺たちは何をやってるんだ？」という気づきは、大人の人材育成にもなりません。原田／長崎市役所の都市経営室におります。山口先生とは水辺の映像祭や、異業種交流の集まりなどで接するようになりました。あらゆるところに先生がいらっしゃる（笑）。自治基本条例づくりでも委員長で活躍してもらいました。市内の大学では長崎大学とお付き合いが一番長いのですが、もっと深く付き

合いたいですね。

曾根／私は市役所の商業振興課で商店街を担当しています。事業者の人材育成事業を組み立てるとき、商業を知らない我々だけではダメだと山口先生に入っていたいただき、まとめもらいました。

ほかのゼミOBの意見も代弁していきます。

安元／アートクエイクという団体の代表をしています。アトでまちづくりを行う団体で、今は浜町の活性化イベントを手がけています。先生とのお付き合いのなかで印象に残っているのは、長崎のコミュニティサークルやNPOを集めたCBSN。大学というのは、地域のなかにあつてこういうこともできるんだと発見しました。それまでの小中高大と続く学校の一つという見方から変わりました。

廣瀬／山口ゼミのOBです。学生時代はたくさんのお会いも経験し、二年間で一〇〇〇人と名刺交換しました。現在、子育てしながら、長崎産の真珠やサンゴを使ったアクセサリー開発販売の事業を手伝っています。介護や育児で外の仕事ができない女性が家でできる仕事を、という理念に共感しました。今日は

山口／実はCBSNを運営していた学生は、安元さんを判断の基準にしていました。自分たちがやってきたことが、一般の人からどう見られているのか。安元さんが苦い顔すると「学生レベルだったか」、ほめてくれると「あ、それなりのことができた」。安元さんも原田さんも「これはおかしい」と学生にハッキリ言ってくれるのです。安元／僕は「学生なのにやっている」という評価はしないと心がけていたからね。

廣瀬／他のOBも「学生なのにえらい」って地域の人に言われると自己満足になると言っています。地域の方の貴重な時間をもらう以上、甘やかさないでと。

山口／小川さんは大学一年生でこれから四年間経済学部で勉強するわけだけど、大学が地域とこういうつながりがあると知っていましたか？
小川／正直、知りませんでした。みなさんそれぞれやっているんですね。でも興味はあるので参加してみたいですね。
山口／今、原田室長のところで経済学部の教養ゼミナール（一年生の教養教育科目）がお世話になっていきます。
原田／「游学のまち」事業の一つです。長崎にはいい企業がたくさんあるけれど、知られていない。そこで学生が企業を取材して紹介パンフにまとめるといふ試みです。商工会議所に相談に行ったら「それは一石二鳥、若い学生が来たら元氣も出る」。折よく経済学部の西村宣彦教授からも「学生を地域に出したい、何かいい方法はないか」と相談を受け、計画がまとまりました。結局十八社が学生とマッチングできました。
山口／草野さんは商店街にいられて地域の状況を持って感じているのではないですか？
草野／そうですね。何しろ商店主の高齢化が一番の問題。それ

でも若い人に買い物物に来てほしいし、お祭りもいっしょにやりたい。ただ、どういう風にやっていいのかわからないのか、大学のどこに話を持って行っていくのかわからない。窓口があるといいですね。企業より商店街と連携するのが一番ハードルが低いんですよ。リクルートスーツはいらなから（笑）。顔なじみになれれば大学生活も豊かになる。そういう自然な関係が商店街と大学

で築けたらいいなあ。そうなれば大人になってお母さんになって、今度はその子がまた来てくれる。そういう循環して地域経済が活性化していきます。安元／長崎で地域課題を抱えて活動している人たちは多いけれど、間をコーディネートする人がいません。地域と大学でもそうで、大学もどうやって地域に手を差し伸べていいのかわからない。そこを含めてコーディネー



曾根ひろみさん

安元哲男さん

小川莉乃さん

山口純哉

廣瀬福子さん

草野一康さん

原田宏子さん

再開の意を
学生が活かし
た見をい!
見をい!ど
んどん
参加して。

新大工町市場理事
草野一康さん



トする人間の存在が大きい。

山口／安元さんはさまざまなかちづくりに関わっていますね。安元／そうですね、深堀地区のまちづくりのワークショップでは大学生がファシリテーターをやるというので私がやり方を教えました。銅座川や岩原川の再開発でも同じようなことやっています。実際に関わっていると、工学部などの先生方や学生との接点は多くて、中立的な専門家である大学人の存在は大きい。ただ、実感としていま一歩突破できず、もどかしい思いもしばしばです。お互いにマインドを持って聞き合うという場面が設定できない。

山口／その「もう一歩」を越えていくために何が必要なのでしょう。廣瀬さんは県の委員会にも入っていますね。普通はみんなくのか。安元／ある種の目標を共有しながらやるのがいい。例えば大学が「これをやったら経済学的にいい」ではなく、「このまちに必要なものはなんだろうか」という視点で研究テーマを選び、みんなが「確かにそれはそうだ」と合意する。それには長期のビジョンを共有すること。

廣瀬／OBからの提案ですが、学生の卒論を地域に対して公開行政と行政の2者だけで話まるより、大学の力が加われれば…

行政と行政の2者だけで話まるより、大学の力が加われれば…

長崎市商業振興課
曾根ひろみさん



尻込みするのには、どうして?

廣瀬／県の次期総合計画懇話会の公募委員に手をあげました。子育て主婦という立場でよければ…と面接で伝えたので何も怖くはありません(笑)。県の将来を考える場でお母さんたちの課題を伝えられるチャンスです。会議前には保育園や身近なお母さんに「どういうことが問題?」とヒアリングします。

山口／どうしてそこまで?

廣瀬／うーん、地域を作っているのは私たち、そう考えることで社会は良くなっていくと大学で学んだから、私もそうありたい。自分のことだけ考えて生きると、地域全体や他の人の気持ちや生活のために自分に何が貢献できるか。一番最初に山口ゼミに入ったとき「あなたはデートよりゼミの活動を優先できますか」という質問に「はい」と言ってしまった(笑)。サークルやバイトよりゼミの用件を優先させた。それだけの覚悟をもってやってきました。

山口／外とつながったときは、それを優先させるということですか(笑)。例えば、安元さんや原田さんのように熱く一生懸命やっていると一緒になにかをやってみる経験は学生にとって重要ですか?



経済学部1年
小川莉乃さん

自分のできるま
で何がまだだけ
な地域か、探り
たい。

してはどうかと。これ実は行っている大学もある。学生は自分たちの研究が地域にどう貢献しているかという視点を入れて発表し、一般の人は学生が何を研究しているのか知ることができ、新しい協力関係が生まれるのではないのでしょうか。原田／大学で先生方同士で地域について話す場はありますか?

山口／最近ポチポチ出てきましたね。それが今回の教養ゼミナールのような動きになったのです。今多いのは地方創生関連。専門分野を活かした大学の教員が関わって政策形成や企業の戦略策定に活かさないか。実はそのために、経済学部が地域とつながるプラットフォーム「地域連携サポートデスク」ができました。そもそも経済学はいろいろな利害対立のある主体

廣瀬／学生って社会経験がない

だけに地域の問題がわかっていない。地域の人と密に関わると、その人達が抱えている問題を自分事としてとらえられます。いつもやりとりしている安元さんが困っていたら、なんとかしてあげたいと本気になれる。でもいきなり学生さん手伝わって言われても本気にならないし、それが授業なら「単位のため」になってしまう。学生も地域の一構成員としての自覚をもっていれば、本気になれる。そのためには普段からつながりを持つておかなければ…。

安元／自分が地域のなかの人間だという自覚するか。僕はこの世界に入るまではサラリーマンでした。会社が自分を守ってくれているから、正直「長崎のことなんて知らないか」と思っていました。しかし会社を離れて地域の中に入ってみると、自分は守られていないことに気づきました。

原田／役所の人間もある意味似ていて、九時から五時までの勤務の枠からなかなか出たがらない。以前、市民との会議が沸騰して「あんたたち仕事でしよるとやろう!」「仕事でこんな時間までするわけなからう!」この地域が好きだからたい!」と

をひっくり返して考えようという質問。「コーディネート」は必然です。

原田／長崎市は大学との包括連携協定を交わしています。そのなかで職員研修の講師も引き受けていただいています。数年で替わる職員を補う意味でもコーディネートが必要で、大学側が担ってくれるとありがたい。地元の方にコーディネート候補がいれば県外から呼ばなくてもいいし。

山口／そうですね。ただ、地域と積極的に関わろうとしている経済学部の教員は、まだそれほど多くありません。全員／えっ!! 原田／…じゃあ…どうやって大学と地域の連携を進めるんでしょう…? 安元／もうおそろしくね、意識のある人でやってくれませんかよ。山口／でも最近は教員の学外での活動情報が公開され、それを見た教員が、何かできることない?と声をかけてくれることもあります。小川さんはここまで座談会を聞いて感想は? 小川／まだまだ知識が足りない自分を実感しました。これだけ一人一人の方々が、それぞれの思いを持っているのに、私は地

大学と企業の
マッチングが
成功すれば、
次々に新しい
事業も展開
できます。

長崎市都市経営室室長
原田宏子さん



夜中までバトルして最後は分かりあった。地域愛ですよ。安元／マインドとしくみと二つあって、マインドの方が重要。

しくみというものもマインドがあれば意外とできるのではないだろうか。我々自身のマインドが足りないのかな。

曾根／ここまでの話を聞いていて、いままでの自分の幅が限定されていたということに気づきました。それを広げるきっかけとしての大学、この座談会もまさにそうですね。商店街と長崎市の二者で計画を作ると、消費者や外の視点がないので自己満足で行き詰まります。やはり第三者が必要ですね。

山口／そういえば、教育学部の吉田ゆり教授がまちや商店街と子育てママの関係を書籍にまとめたばかりです。子どもを持つ

域のことを知らなかったんだなあと。地域愛に結びつくようなアクションを自分からおこないたいですね。

廣瀬／あのね、最初は自分事と思えないかもしれない。でもとにかく何かチャレンジしてみよう。そのときわからなくても、社会に出てから間違いなくその経験はプラスになります。実行力がついてアウトプットが多くなる。

草野／この前、新大工町の再開発で長大生にアンケートをとったときに、まちづくりに関して興味のある人が多かった。自分たちが就職したり子育てしたりするときに必要なものを意見として出していけば、案外短期間に実現するかもしれません。原田／自治基本条例が制定されたら、例えば「自分が市長に

地域の一員で
いることに、あ
つづきつか、あ
はあつかないか。

アートクエイ代表
安元哲男さん



ことでまちの意味が変わってくるといふ指摘も興味深いです。廣瀬／産後にまちを見る視点が変わったのは、おっしゃる通りです。ベビーカーで電車やバスに乗りやすかったら商店街でもっと買い物ができるのにと。でもハード以前に商品の魅力も重要。どこだろうと欲しいものがあれば行くし、同じ品揃えなら設備が整っていて一カ所で完結する大型商業施設を利用します。

曾根／子育てママの視点は大切ですね。商店街の会合は男性ばかりになりがちなので、女性の集まりを企画して吉田先生のような専門家に関わってもらえれば違う気づきがありそうですね。山口／地域のいろいろな主体がギブ&テイク、または三方良しの関係性を築くためには相手を知って共感することや役割分担

地れら出
時代に鍛えら
ると、社会に
大域で鍛えら
ると、絶対
なりになります。

山口ゼミOB
ナガサキ・マジェンタ100
廣瀬福子さん



なったら」というような政策提言を受けるようなプロジェクトを行いたいですね。

安元／我々のまわりには生きた教材がいっぱいあります。それをキーにできることは多い。共有の場に、地域のために貢献したいという人が出入りすれば、人が入れ替わっても、つながっていきます。

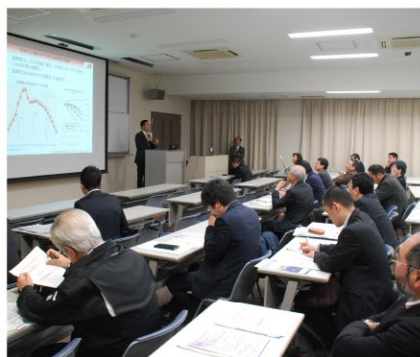
原田／勤務する課が変わっても参加できる、大学生が卒業しても参加できるような場。大学は中立の立場だから、場を作りやすいし集めやすいと思います。

山口／重要な指摘があります。まず、学生も教員も、地域で学ぶ、暮らす一員として地域のビジョンを共有すること。次に、ビジョンの実現にかかる課題解決のために、教員に加えて学生の研究等にかかる情報も広く公開し、大学の役割を考えると。そして、ビジョンの共有から課題解決の過程において、多様な主体がつながる場を、ニュートラルな立場の大学なら設けられる可能性があることです。分野によって形は様々ですが、これらを念頭に置きながら、学問の府として大学が果たすべき役割を考え、実践していきたいと思います。ありがとうございました。

経済学部が「ハブ」になる 地域連携サポートデスク

高校などの教育機関や企業、行政が、長崎大学と協働したいときに気軽に相談できるワンストップの窓口があれば…。そんな声を受けて昨年立ち上げたのが、経済学部の「地域連携サポートデスク」。運営の中心を担う福澤勝彦教授のお話です。「実は学内でも地域とつながりたいがネットワークがないと悩む教員も多い。双方の風通しをよくし、プラットフォームの役割を持った組織です」。さっそく北海道から持ち込まれた案件をきっかけに今年3月にシンポジウムが実現。「産業技術総合研究所（産総研）北海道センターから、水産業や食品製造業に使う氷の新技术を用いて長崎で何かできればと相談をもちかけられ、我々が長崎の行政や水産・観光業界に声をかけ、一堂に会しました。考えてみると、北海道と長崎は、どちらも水産業と観光が基幹産業。しかしこれまで情報交換のルートはなかったの、非常に有意義なマッチングになりましたよ」。経済界との太いパイプや同窓会組織の瓊林会の心強いバックアップという、経済学部の特長を生かしたこの組織。経済に限定せず、さまざまなジャンルの連携の仲立ちに期待が寄せられています。

問い合わせ E-mail junya-y@nagasaki-u.ac.jp



経済学部で行われたシンポジウム「観光と水産：長崎と北海道の広域連携を目指して」。100名以上が集まり熱気も予想以上。ここからいくつものアイデアが生まれ、実現に向けて動き出しました。

母親とまちの関係を 調査から明らかに

教育学部の吉田ゆり教授は、この7月に専門書『子育て期の母親の自己効力感を支える都市環境整備の研究』（風間書房）を出版されます。「前任地の鹿児島時代を含め、10年ほど進めてきた研究の集大成です。『自己効力感』とは、先を見て何とかやっていけそうという考え。子どもを持つことで、それまで住んでいたまちの意味は変わります。施設の不備に自分が拒否されたと感じ、逆にちょっとした心遣いで救われる母親もいます。そのまちとの関わりの強い人ほど、拒否されたときのショックは大きいというデータも。整備のやり方も『予算が出たから作った』ではなく、主体である母親に子育て応援メッセージが届かないようでは意味がありません」。30組以上の親子の外出に同行し、身近な不具合や母親の動揺をリアルタイムで記録。心理学的手法で解明していきました。

斜面地が多くて市電のある長崎は、手を付けるべき課題もまだまだ山積みです。先生の専門的な見地が今後ますます必要とされています。



写真上／7月に出版予定の書籍『子育て期の母親の自己効力感を支える都市環境整備の研究』（風間書房）左／吉田先生。

長崎県内の 二級河川の 整備に専門的に 関わる

ここ数年、長崎の川が変化しています。例えば、銅座川は上部の駐車場が撤去されて水面を見せ、再開発計画が進行中。また大黒町市場を撤去して現れた岩原川周辺の整備も始まりました。一連の河川事業で出番が増えているのが、工学研究科の夢田彰秀教授。長崎県が管理する二級河川の河川整備計画策定委員会の委員長です。「河川整備基本方針は国や県で作られますが、整備には地元の意向も大切です。その間を取り持つのが、ニュートラルな大学の人間の仕事でしょう」。同じ流域でも管轄が異なったり、完成まで何十年もかかるなど、川の整備は独特の難しさがあります。「地域によって意識の温度差は激しくて、川に対する住民の関心度は川の現状を見るとわかります。私はワークショップなどで、市民の声をもっと聴き取りたい。防災も含め、住んでいる人が川を含めた流域をどうしていきたいかが一番大切です」。

行政と市民の間だけでなく、行政機関の間の意志疎通も先生のような研究者が入ることでスムーズにいくこともあるそうです。



河川工学が専門の夢田先生。長崎市出島史跡整備審議会の委員として表門橋の整備にも関わっており、長崎のまちづくりには欠かせない存在です。

座談会に出てきた話題を、
さらに詳しく
クローズアップ!

地元企業×1年生 新しい教養ゼミナール

経済学部と長崎市都市経営室、そして商工会議所青年部が一体となって進めているのが、「游学のまち」プロジェクトの一環でもあるビジネス育成プログラム。6人の先生方の下で学ぶ1年生90人が18のグループに分かれて地元企業を取材、その特長やセールスポイントをまとめ、企業紹介の冊子を発行するという新しい教養ゼミナールです。社会経験の浅い1年生のハジメの一步でもあり、経営者へのヒアリングは勉強にもなります。ご協力くださる企業にとっても最終的にPRとなれば、まさにWINWIN! まとめ役の西村宣彦教授によれば「経済学部は3年生で企業と組んで課題発見を経験するPBLプログラムがあるのですが、これはその前段階。調整や付添いは3年生が担当するというシステム」とのことです。



レンタカー会社「J-Net」でのヒアリングの一コマ。若手経営者の熱い思いを真剣に受け止める1年生の眼差しは真剣そのもの。松下太郎社長は「思った以上に積極的で、けっこう鋭いところを突いてくる。でも、うらやましいな。僕らの時はこんな授業なかったですよ」とも。

長崎市の新しい自治基本条例に「大学」への期待が!

これから制定される予定の「長崎よかまちづくり基本条例」（自治基本条例）は、平成25年から27年にかけて、さまざまな分野で活躍する市民委員と行政が同じテーブルで何度も議論を重ねながら作り上げたものです。その検討委員会の委員長が山口純哉先生。「大学もまちを構成する主体の一つ。地域唯一の総合大学として、長崎大学はまちづくりにおける多様な分野の専門性を備えています。参加や協働といったまちづくりの基本原則を踏まえて、長崎大学ならではの強みを活かした積極的な関わりが求められています」。

保健学実践教育研究センター
を中心に新たな挑戦

前号にひきつづき、長崎大学医学部の最前線をご紹介します。今回は保健学科です。

田中悟郎保健学科長にお話を聞きました。

「医学部保健学科の歴史は古く、明治三十六（一九〇三）年に県立長崎病院附属看護婦養成所として発足して今年で一二二年になります。原爆で壊滅的な被害をうけましたが、諫早や大村に場を移して教育が続けられてきました。昭和五十九年には長崎大学医療技術短期大学部として看護学科、理学療法学科、作業療法学科が設置されました。平成十三年には長崎大学医学部保健学科となり、その後、修士・博士課程ができました」。

時代のニーズに対応しながら、看護学、理学療法学、作業療法学の三つの専攻と大学院が確立されています。大学院教育では、高度な臨床能力や研究能力、地域貢献能力を備えた高度専門職業人の育成を推進しています。例えば、がんや放射線、遺伝など専門的な知識を持つ看護師や助産師の養成コースを持ち、各ジャンルのスペシャリストが指導しています」。

一度社会に出た現職者を対象とした教育も行われていると聞きました。「保健学科では、昨年度二つの高度医療人材養成のための社会学び直しプログラムが文部科学省の支援を受けることになりました。一つは「生き生きと働く実践力のある助産師キャリアアッププログラム」（三年間）、もう一つは理学療法士と作業療法士を対象にした「高度リハビリテーション専門職の養成―長崎地域包括ケアシステムを活用したプログラム―」（五年間）です。これらのプログラムを通じて地

長崎大学のいま!

医学部

保健学科

目指すのは
リーダーの資質をもつ
高度医療人材の育成



田中悟郎
医学部 保健学科長

たなか 悟郎
長崎大学医学部保健学科作業療法学専攻教授。九州大学大学院人間環境学府博士課程修了。青年海外協力隊、国立肥前療養所、北九州市立イケアセンター、長崎大学医療技術短期大学部等を経て平成二十年より現職。専門は精神障害作業療法学・精神障害リハビリテーション学。平成十六年四月より保健学科長。

域のニーズに応じた人材を育成していきます」。

この二つのプログラムの調整や、学部学生の現場での実習を組み立てるのが、昨年度内にできた保健学実践教育研究センター。統括する井口茂教授のお話です。

「実習プログラムは、学内の他学部や、病院、外部の施設や専門職能団体との綿密なコーディネートが欠かせません。かつてのように教員が個々に対応したり、病院・施設に委託したりするよりも、窓口を一本化して組織で取り組む方が効率も質も上がります。センターは保健学科全体の臨床教育の強化の支えをしているのです」。

理論も大切ですが、まず体が動くかどうか。社会での実践力は大学時の臨床実習の豊富さがカギなのだそう。

各専攻への
高い求人倍率

保健学科の卒業予定者には求人が多く就職活動がスムーズというのは本当ですか？

「その通りです。看護学専攻の学生の場合、全国的に求人数は非常に多く、大病院などほぼ学生が希望する職場に就職できています。また、理学療法学や作業療法学専攻の学生においても県内から卒業予定者数の約五倍の求人が毎年あり、全体で五割以上が長崎に就職しています。また昨年度は県外からの求人も四五〇〇名以上ありました」。

それはすごい！ところで、保健学科の講義棟は長崎大学病院を見下ろす坂本の高台にあり、学生は通うだけで体力がつきそうです。

「医療者は体が資本ですからね

（笑）。とはいえ、確かに毎日の登り坂は少々大変かもしれません。そのため昨年、エレベーターが設置され、とても移動しやすくなりました。また、一部の講義室や実習室が大学病院とつながった旧歯学部C棟の四階に新設されました。大学病院での実習も多いので大変便利になりました」。

それは学生にとっても耳よりなニュースです。

「現在、下の棟にできたのは講義室、実習室など四室だけですが、将来的には保健学科の学生が使用できる教室がさらに増えると思います」。

より高い専門性と多くの実習経験。一度実社会に出た後でも高度医療が学べる体制が医学部保健学科の強みといえます。



旧歯学部C棟に新しく併設された講義室。このほか実習室など4室あり。



ヨーロッパ研修ではジュネーブにおいて、世界保健機関(WHO)でも研修。